

BCS

PRIZE-WINNING WORKS



BCS賞受賞作品探訪記

29

第四三回受賞作品（二〇二一年）

群馬県立館林美術館

後編

前編では、プロジェクトがテーマに沿った敷地探しから始まった経緯などを紹介した。後編は建築家・高橋誠一氏（第二工房代表）の設計による魅力に満ちた建築を現実につくり上げた施工サイドの努力、また、美しい建築を日常的に支える維持管理について紹介する。

曲線、曲面を 現実につくり上げる

さわやかな緊張感を保ちつつ、やさしい雰囲気をもつ群馬県立館林美術館。多くの人を魅了する建築の施工に携わったのは大林組・河本工業・りんかい建設（現・りんかい日産建設）JVである。建設当時、建築工事長を務めた西宏明氏は「高い精度が求められ、粘り強く工事を行った現場でした」と回想する。着工時に現地に乗り込んだときの光景も記憶に鮮やかだ。地盤改良によって造成した後にJVが施工を開始したが、現地は地盤が軟弱な湿地帯であるため、

まずはクレーンなど重機の足元を確保しなければならなかった。長い形の建物周囲に延々と鉄板を敷き詰めていったという。「いろいろな曲線で設計されているのがこの美術館の特徴なので、それを現実の形にするときは特に集中しました」と西氏。建設の初期の段階では、建物の基礎を支える杭を打っていくが、その前に位置を出しておく必要がある。一階のギャラリ―は約二〇メートルにわたり、緩やかな曲線を描いているが、異なる中心点と異なる半径を持つ弧をつな



第1展示室の内部。おおらかな曲面を描く天井から床までガラスがはめ込まれ、東向きに開放されている。コレクションの中からフランソワ・ポンポンをはじめとする国内外の彫刻作品が展示され、年に4回ほど展示替えが行われている。



美術館の2階はアルミパネルで覆われ、1階はガラス張りのギャラリ―が東西に伸びている。



エントランスへ向かうと、ギャラリーの外壁に沿ってカスケード（小さい滝）が設けられ、さわやかな水音をたてる。

いる第四展示室では、モックアップ（図面通りに制作した実物大の模型）による確認が生かされている。第四展示室には、展示する内容に合わせてトップライトから自然光を取り入れ、人工照明と組み合わせる高度な調光システムが採用された。天候によって自然光の明るさを人工照明が自動的にバックアップしていくプログラムが組み込まれており、フィルターとしてトップライトの複層ガラスや電動調光ルーバー、軟質フッ素樹脂加工の積層膜を通して均質な光を天井

バイオ製剤を使い、 水質を浄化

群馬県立館林美術館を訪れると、



第1展示室の外観。曲面の屋根の底はアルミパネル。外壁も前面のガラスも上部を外側に5度傾けている。外壁は、アフリカンレッドの花崗岩を石積みのような表情に張っている。

いだものである。図面から敷地に落とし込むため、事前に座標を交換し測量を行った。「ギャラリーの杭は二四五本打ちました。レーザーで正確な距離や角度を測りながら、杭芯の位置、つまりポイントを出し、目印を付けるんですが、当然一本一本の位置が微妙に変わっていくので、ポイント出しも一本一本慎重に行う必要があります。直線上と違って、しつかりマーカーキングしておかないと、杭を打つ位置がわからなくなってしまうんです」。

三次元曲面で構成された 近現代彫刻の展示空間

曲線を形に起こすという点で、最も力が入ったのは第一展示室の施工だったという。群馬県立館林美術館は、ギャラリーの前面に広がる芝生広場を展示空間に取り込むように想定して設計されている。その一部として屋根を架けたのが第一展示室だ。美術館が収集しているフランソワ・ポンポンをはじめとする国内外の彫刻作品をゆつたりと展示し、その独自性を表現

する場でもある。平面形状はゆるいカーブを描く半円形。屋根は流れるような凹曲面で高さが変化している。開口を東向きに設け、前面をガラス張りにして野外と一体感を持たせながら、足元の床が地面とつながるイメージで設計されている。ガラスは無色で高透過性の合わせ複層ガラス。ガラスの向こうには半円形の花壇がくり込まれ、芝生広場につながっていく。さらにガラス面の上部を傾け、軒先がシャープなラインを描きながら、空へ向かって上昇するようにアルミパネルが張られている。内部の天井もゆるやかな曲面を描く。外壁は逆円錐で、壁面には美しい赤味をもつ花崗岩が石積みの表情で張られている。美術館を巡る方の視角によって姿が変化するので、建物の存在感が増す。

「図面を見たときに、これは骨が折れるなと思いましたね」と西氏が振り返る。「前面のガラスを取り付けるステンレスの柱が二七本あり、傾きながら高さも少しずつ変化しているんです。柱の上端と下端が三つの座標で示されてい



第4展示室。天井は光天井。自然光と人工照明を混合する自動調光システムを採用。

て、それを三次元トランシットという測量器を使ってポイントを確認しました」。柱は見た目には天井の中へすっきりと吸い込まれていくように見える。「天井内部には直径一六五ミリの丸形の鉄骨梁を曲げながら通してあり、その梁をジョイントを介して柱が受けています」。見えないところに曲面を実現する構造部分が隠されているのだった。

展示室の高度な光天井の ためにモックアップを制作

ギャラリーに沿って設けられて

施工者より

苦労もありましたが、来館者が 感動する美術館ができました



株式会社大林組
建築事業部ビルケアセンター
アフターケア部 副部長
西 宏明

Hiroaki Nishi

私は平成十一年三月から本體工事が終わった平成十二年十月までプロジェクトに携わりました。工事中には群馬県の名物と言われている空っ風や雷も体験しました。風については安全上の問題がないように対策してあるのですが、雷はどこに落ちるかわかりません。

ちょうど第一展示室の鉄骨建方をやっていたとき、ゴロゴロと鳴りだしたので、工事を一時中断しました。幸い落雷はなかったのですが、面食らったことを覚えていま

す。

フランスにある昔の農家の建物を移築するという別館の計画が変更となり、新築で再現することになったときには、屋根に使うフランス瓦や太い古材などを現地へ運び込み、それらを使って鉄筋コンクリート造の躯体を仕上げました。しかし、古い感じに仕上げるようにと言われると私たちは少し戸惑ってしまふんですね。何しろ、普段は建物を新築していますから、古く見せることには不慣れなものでなかなか難しい。現場で何度も設計担当の方に確認してもらいながら工事を進めたことを思い出します。

その後、平成十三年に群馬県立館林美術館がオープンしてから、家族を連れて行きました。現場を見せることはあまりなかったのですが、子供がきれいな建物だねと言ってくれたときは、とてもうれしかったですね。



美術館の東側に建てられた別館。フランソワ・ボンボンの生誕地の農家のイメージを再現。石灰岩の乱積みで仕上げた外壁も美しい。内部は「彫刻家のアトリエ」とワークショップ室が設けられている。

建物の美しさが保たれていることにも気づかされる。「特別なことではなく、必要な初期対応をきちんと行うということです。故障なく毎日開館できるように備えています」と語るのは施設管理を担当している高田晴夫係長。地道な日常の努力が美術館を支えているということがわかる一言だ。

夏場には来館者からクレームが寄せられることもあった。建物が美しいだけに藻が目立ってしまうのだ。「これまで清掃を繰り返してきたんですが、せっかくきれいにしても二、三週間でまた藻が発生してしまう。メンテナンスの予算にも限りがあり、以前から大きな課題だったんです」。佐々木正直館長は「昨年はこのままだと水を抜くしかないという話まで出て、たいへん心配しました。カスケードの水がなくなったらこの美術館の魅



別館のエントランスロビー。天井の梁やドア材にはヨーロッパで入手した古材が使われている。

力は半減してしまいます」と、切羽詰まった状況だったことを明かしてくれた。高田係長がさまざまな方策を探した結果、水質浄化に有効なバイオ製剤で対応できそうだとうかつた。試したところ、カスケードの水はきれいに保たれている。

サインのあり方にも配慮する

「来館者の方々から寄せられる感想を見ると、この美術館の環境

や施設を大切に思ってくださっていることがわかります」と語るのは中島幸子学芸係長。学芸員として建築の質やコンセプトを意識し、館内掲示物には日頃から気をつけているという。「いろいろな注意書きを貼ったりしがちなんです、開館当初からサインや印刷物をトータルにデザインして美術館の全体のイメージがつくられています。きちんと配慮していかないと、段々に崩れてしまう恐れがあります」。つくり手が建築に込めた思いと、来館者、美術館の関係者の思いが互いに循環することで、多くの人が共感する場が生まれるのだろう。



別館のワークショップ室。古材や石が使われたインテリアも好評で、たくさんの子供たちが体験イベントに参加している。(提供：群馬県立館林美術館)